■山月記　中島敦　評価問題

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところすこぶる厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。いくばくもなく官を退いた後は、故山、虢略に帰臥し、人と交わりを絶って、ひたすら詩作にふけった。下吏となって長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚がらず、生活は日を追うて苦しくなる。李徴はようやく焦燥に駆られてきた。このころからその容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみいたずらに炯々として、かつて進士に登第したころの豊頬の美少年のおもかげは、どこに求めようもない。数年の後、貧窮に堪えず、妻子の衣食のためについに節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。かつての同輩は既にはるか高位に進み、彼が昔、［　I　］として歯牙にもかけなかったその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の儁才李徴の自尊心をいかに傷つけたかは、想像に難くない。彼は快々として楽しまず、狂悖の性はいよいよ抑え難くなった。一年の後、公用で旅に出、汝水のほとりに宿ったとき、[1]ついに発狂した。ある夜半、急に顔色を変えて寝床から起き上がると、何かわけの分からぬことを叫びつつそのまま下にとび下りて、闇の中へ駆け出した。彼は二度と戻ってこなかった。付近の山野を捜索しても、何の手がかりもない。その後李徴がどうなったかを知る者は、誰もなかった。

翌年、監察御史、陳郡の袁傪という者、勅命を奉じて嶺南に使いし、途に商於の地に宿った。次の朝いまだ暗いうちに出発しようとしたところ、駅吏が言うことに、これから先の道に人食い虎が出るゆえ、旅人は白昼でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、いま少し待たれたがよろしいでしょうと。袁傪は、しかし、供回りの多勢なのを恃み、駅吏の言葉を退けて、出発した。残月の光をたよりに林中の草地を通って行ったとき、果たして一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。虎は、あわや袁傪に躍りかかるかと見えたが、たちまち身を翻して、もとの叢に隠れた。叢の中から人間の声で「あぶないところだった。」と繰り返しつぶやくのが聞こえた。その声に袁傪は聞き覚えがあった。驚懼のうちにも、彼はとっさに思いあたって、叫んだ。「その声は、我が友、李徴子ではないか？」袁傪は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少なかった李徴にとっては、最も親しい友であった。温和な袁傪の性格が、峻峭な李徴の性情と衝突しなかったためであろう。

叢の中からは、[2]しばらく返事がなかった。しのび泣きかと思われるかすかな声が時々漏れるばかりである。ややあって、低い声が答えた。「いかにも自分は隴西の李徴である。」と。

袁傪は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐かしげに久闊を叙した。そして、なぜ叢から出てこないのかと問うた。李徴の声が答えて言う。自分はいまや異類の身となっている。どうして、おめおめと故人の前にあさましい姿をさらせようか。かつまた、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭の情を起こさせるに決まっているからだ。しかし、今、図らずも故人に会うことを得て、愧赧の念をも忘れるほどに懐かしい。どうか、ほんのしばらくでいいから、我が醜悪な今の外形を厭わず、かつて君の友李徴であったこの自分と話を交わしてくれないだろうか。

後で考えれば不思議だったが、そのとき、袁傪は、この超自然の怪異を、実に素直に受け入れて、少しも怪しもうとしなかった。彼は部下に命じて行列の進行をとどめ、自分は叢の傍らに立って、見えざる声と対談した。都の噂、旧友の消息、袁傪が現在の地位、それに対する李徴の祝辞。青年時代に親しかった者どうしの、あの隔てのない語調で、それらが語られた後、袁傪は、李徴がどうして今の身となるに至ったかを尋ねた。叢中の声は次のように語った。

今から一年ほど前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊まった夜のこと、一睡してから、ふと目を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出てみると、声は闇の中からしきりに自分を招く。覚えず、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駆けて行くうちに、いつしか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地をつかんで走っていた。何か身体（からだ）じゅうに力が充ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えて行った。気がつくと、手先や肱（ひじ）のあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなってから、谷川に臨んで姿を映してみると、既に虎となっていた。自分は初め目を信じなかった。次に、これは夢にちがいないと考えた。夢の中で、これは夢だぞと知っているような夢を、自分はそれまでに見たことがあったから。どうしても夢でないと悟らねばならなかったとき、自分は茫然とした。そうして懼れた。まったく、どんなことでも起こり得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、なぜこんなことになったのだろう。分からぬ。まったく何事も我々には分からぬ。理由も分からずに押しつけられたものをおとなしく受け取って、理由も分からずに生きていくのが、我々生きものの**さだめ**だ。自分はすぐに死を想うた。しかし、そのとき、目の前を一匹の兎が駆け過ぎるのを見たとたんに、自分の中の**人間**はたちまち姿を消した。再び自分の中の**人間**が目を覚ましたとき、自分の口は兎の血にまみれ、あたりには兎の毛が散らばっていた。これが虎としての最初の経験であった。それ以来今までにどんな所行をし続けてきたか、[3]それはとうてい語るに忍びない。ただ、一日のうちに必ず数時間は、人間の心が還ってくる。そういうときには、かつての日と同じく、人語も操れれば、複雑な思考にも堪え得るし、経書の章句を誦んずることもできる。その人間の心で、虎としての己の残虐な行いのあとを見、己の運命を振り返るときが、最も情けなく、恐ろしく、憤ろしい。しかし、その、人間に還る数時間も、日を経るに従ってしだいに短くなっていく。今までは、どうして虎などになったかと怪しんでいたのに、この間ひょいと気がついてみたら、おれはどうして以前、人間だったのかと考えていた。これは[4]恐ろしいことだ。いま少したてば、おれの中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋もれて消えてしまうだろう。ちょうど、古い宮殿の礎がしだいに土砂に埋没するように。そうすれば、しまいにおれは自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂い回り、今日のように途で君と出会っても故人と認めることなく、君を裂き食ろうて何の悔いも感じないだろう。いったい、獣でも人間でも、もとは何かほかのものだったんだろう。初めはそれを覚えているが、しだいに忘れてしまい、初めから今の形のものだったと思い込んでいるのではないか？　いや、そんなことはどうでもいい。[5]おれの中の人間の心がすっかり消えてしまえば、おそらく、そのほうが、おれはしあわせになれるだろう。だのに、おれの中の人間は、そのことを、このうえなく恐ろしく感じているのだ。ああ、まったく、どんなに、恐ろしく、哀しく、切なく思っているだろう！　おれが人間だった記憶のなくなることを。この気持ちは誰にも分からない。誰にも分からない。おれと同じ身の上になった者でなければ。ところで、そうだ。おれがすっかり人間でなくなってしまう前に、一つ頼んでおきたいことがある。

袁傪はじめ一行は、息をのんで、叢中の声の語る不思議に聞き入っていた。声は続けて言う。

ほかでもない。自分は元来詩人として名を成すつもりでいた。しかも、業いまだ成らざるに、この運命に立ち至った。かつて作るところの詩数百編、もとより、まだ世に行われておらぬ。遺稿の所在ももはや分からなくなっていよう。ところで、そのうち、今もなお記誦せるものが数十ある。これを我がために伝録

していただきたいのだ。なにも、これによって一人前の詩人面をしたいのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、一部なりとも後代に伝えないでは、死んでも死にきれないのだ。

袁傪は部下に命じ、筆を執って叢中の声に従って書きとらせた。李徴の声は叢の中から朗々と響いた。長短およそ三十編、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、袁傪は感嘆しながらも漠然と次のように感じていた。なるほど、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないか、と。

旧詩を吐き終わった李徴の声は、突然調子を変え、自らを嘲るがごとくに言った。

恥ずかしいことだが、今でも、こんなあさましい身と成り果てた今でも、おれは、おれの詩集が長安風流人士の机の上に置かれているさまを、夢に見ることがあるのだ。岩窟の中に横たわって見る夢にだよ。嗤ってくれ。詩人に成りそこなって虎になった哀れな男を。（袁傪は昔の青年李徴の自嘲癖を思い出しながら、哀しく聞いていた。）そうだ。お笑い草ついでに、今の懐いを即席の詩に述べてみようか。この虎の中に、まだ、かつての李徴が生きているしるしに。

袁傪はまた下吏に命じてこれを書きとらせた。その詩に言う。

偶因二狂疾一成二殊類一　災患相仍不レ可レ　Ⅱ
今日爪牙誰敢敵　当時声跡共相高
我為二異物一蓬茅下　君已乗レ軺気勢豪
此夕渓山対二明月一　不レ成二長嘯一但成レ嘷

時に、残月、光冷ややかに、白露は地にしげく、樹間を渡る冷風は既に暁の近きを告げていた。人々はもはや、事の奇異を忘れ、粛然として、この詩人の薄倖を嘆じた。李徴の声は再び続ける。

なぜこんな運命になったか分からぬと、先刻は言ったが、しかし、考えようによれば、思い当たることが全然ないでもない。人間であったとき、おれは努めて人との交わりを避けた。人々はおれを倨傲だ、尊大だと言った。実は、それがほとんど［Ⅲ］に近いものであることを、人々は知らなかった。もちろん、かつての郷党の鬼才と言われた自分に、［Ⅳ］がなかったとは言わない。しかし、それは臆病な［Ⅳ］とでも言うべきものであった。おれは詩によって名を成そうと思いながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交わって切磋琢磨に努めたりすることをしなかった。かといって、また、おれは俗物の間に伍することも潔しとしなかった。ともに、我が臆病な［Ⅳ］と、尊大な［Ⅲ］とのせいである。［Ⅴ］がゆえに、あえて刻苦して磨こうともせず、また、［Ⅵ］がゆえに、碌々として瓦に伍することもできなかった。おれはしだいに世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慚恚とによってますます己の内なる臆病な［Ⅳ］を飼いふとらせる結果になった。[6]人間は誰でも猛獣使いであり、その猛獣に当たるのが、各人の性情だという。おれの場合、この尊大な［Ⅲ］が猛獣だった。虎だったのだ。これがおれを損ない、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、おれの外形をかくのごとく、内心にふさわしいものに変えてしまったのだ。今思えば、まったく、

おれは、おれの持っていたわずかばかりの才能を空費してしまったわけだ。人生は何事をもなさぬにはあまりに短いなどと口先ばかりの警句を弄しながら、事実は、才能の不足を暴露するかもしれないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰とがおれのすべてだったのだ。おれよりもはるかに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となった者がいくらでもいるのだ。虎と成り果てた今、おれはようやくそれに気がついた。それを思うと、おれは今も胸を灼かれるような悔いを感じる。おれにはもはや人間としての生活はできない。たとえ、今、おれが頭の中で、どんな優れた詩を作ったにしたところで、どういう手段で発表できよう。まして、おれの頭は日ごとに虎に近づいていく。どうすればいいのだ。おれの空費された過去は？　おれはたまらなくなる。[7]そういうとき、おれは、向こうの山の頂の巌に上り、空谷に向かって吼える。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。おれは昨夕（ゆうべ）も、あそこで月に向かって咆えた。誰かにこの苦しみが分かってもらえないかと。しかし、獣どもはおれの声を聞いて、ただ、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂って、哮（たけ）っているとしか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人おれの気持ちを分かってくれる者はない。ちょうど、人間だったころ、おれの傷つきやすい内心を誰も理解してくれなかったように。[8]おれの毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない。

ようやくあたりの暗さが薄らいできた。木の間を伝って、どこからか、暁角（ぎょうかく）が哀しげに響き始めた。

もはや、別れを告げねばならぬ。酔わねばならぬときが、（虎に還らねばならぬときが）近づいたから、と、李徴の声が言った。だが、お別れする前にもう一つ頼みがある。それは我が妻子のことだ。彼らはいまだ虢略にいる。もとより、おれの運命については知るはずがない。君が南から帰ったら、おれは既に死んだと彼らに告げてもらえないだろうか。決して今日のことだけは明かさないでほしい。厚かましいお願いだが、彼らの孤弱を憐れんで、今後とも道塗に飢凍することのないように計らっていただけるならば、自分にとって、恩倖、これに過ぎたるはない。

言い終わって、叢中から慟哭（どうこく）の声が聞こえた。袁もまた涙を浮かべ、喜んで李徴の意に添いたい旨を答えた。李徴の声はしかしたちまちまた先刻の自嘲的な調子に戻って、言った。

本当は、まず、このことのほうを先にお願いすべきだったのだ、おれが人間だったなら。飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業のほうを気にかけているような男だから、こんな獣に身を堕すのだ。

そうして、付け加えて言うことに、袁傪が嶺南からの帰途には決してこの途を通らないでほしい、そのときには自分が酔っていて故人を認めずに襲いかかるかもしれないから。また、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に上ったら、こちらを振り返って見てもらいたい。自分は今の姿をもう一度お目にかけよう。勇に誇ろうとしてではない。我が醜悪な姿を示して、もって、再びここを過ぎて自分に会おうとの気持ちを君に起こさせないためであると。

袁傪は叢に向かって、懇ろに別れの言葉を述べ、馬に上った。叢の中からは、また、堪え得ざるがごとき悲泣の声が漏れた。袁傪も幾度か叢を振り返りながら、涙のうちに出発した。

一行が丘の上についたとき、彼らは、言われたとおりに振り返って、先ほどの林間の草地を眺めた。たちまち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼らは見た。虎は、既に。白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮したかと思うと、また、もとの叢に躍り入って、再びその姿を見なかった。

問　空欄Ⅰに入る語句として最も適当なものを、次から選べ。思

ア　難物　　イ　好物　　ウ　逸物　　エ　鈍物　　オ　堅物

答　エ

問　傍線部1とあるが、それはなぜか。適当でないものを、次から二つ選べ。思

ア　妻子の生活のために文学を断念したことに割り切れない思いをいだいていたから。
イ　文名が容易に揚がらないために焦燥感に駆られ追い詰められていたから。
ウ　再び官吏になったものの自分の適性に合った職種ではなかったから。
エ　かつての同輩よりはるかに低い官位に甘んじることができなかったから。
オ　生活が苦しく、食事を満足にとれないことに耐えられなくなったから。

答　ウ・オ

問　傍線部2とあるが、それはなぜか。最も適当なものを、次から選べ。思

ア　自分よりもはるかに文才に富む袁傪に対しては、常に劣等感を抱いており、言葉を交わしたくなかったから。
イ　袁傪が中央官庁から自分を捜索しに派遣されたことを察知し、出頭すべきか否か、大きな迷いがあったから。
ウ　かつて親しかった袁傪に対して懐かしくもあまりに恥ずかしく、どう対処すべきかわからなかったから。
エ　監察御史にまで出世した袁傪がねたましくうとましく、「我が友」と声を掛けてきたことが不愉快だったから。
オ　最も親しい友人であった袁傪を襲おうとしたことを痛切に後悔しており、合わせる顔がなかったから。

答　ウ

問　傍線部3とあるが、それはなぜか。説明せよ。思

答　人間の気持ちで、獣である己の所行を振り返って見た時、それがあまりに非道で残忍だから。

問　傍線部4とあるが、李徴は何を「恐ろしい」と感じているのか。最も適当なものを、次から選べ。思

ア　自分自身が人間の理性をもはや完全になくして、虎の本能だけに支配されてしまっていること。
イ　自分自身の存在が、人間の理性ではなくて虎の本能に支配されつつあるのをとめられないこと。
ウ　自分自身が理由も分からずに生きていかざるを得ない生きもののさだめから逃れようとしていること。
エ　自分自身が残虐な行いを反省し、その運命を振り返る時間の、あまりの長さに苦しめられること。
オ　自分自身が人間を食べることでしか生きていけなくなったと何度も思い知らされること。

答　イ

問　傍線部5とあるが、それはなぜか。最も適当なものを、次から選べ。思

ア　人間としての自分の過去を忘れ果てれば、過去の官僚生活で受けた屈辱や経済的困窮の記憶に苦しめられなくなるから。
イ　人間の心で虎としての自分の残虐な行いのあとを見て、己の運命を振り返らざるを得ない恐怖から解放されるから。
ウ　人間も獣も初めから今の形のものだったと思い込むのは間違いではないかという難問に悩む必要がなくなるから。
エ　人間に還る数時間に、どうして自分が虎になってしまったのかをあれこれ考える、無駄な時間がなくなるから。
オ　場合によっては人間に戻ることができるかもしれないという、叶うはずのない希望を捨てることができるから。

答　イ

問　空欄Ⅱに入る漢字として最も適当なものを、次から選べ。思

ア　避　イ　治　ウ　癒　エ　逃　オ　闘

答　エ

問　李徴による即席の詩の解釈として適当でないものを、次から選べ。思

ア　思いがけなく狂気にとりつかれて私は獣になってしまった。そして、災いが重なりこの運命はどうにもならない。
イ　虎となった今日、私の鋭い爪や牙に歯向かう者は誰もいない。自分自身を憎み蔑むこの私自身を除いては。
ウ　かつての私はあなたとともに世間の評判は高かった。
エ　今や私は獣となり草むらに隠れている。一方で、あなたはすでに出世して立派な車に乗り、気勢が盛んである。
オ　渓谷や山間を照らす明月に向かって、今の悲しい思いを吟じようとしても、ただ獣の咆哮にしかならない。

答　イ

問　李徴による即席の詩の中から、「虎」を意味している表現を二つ抜き出せ。思

答　殊類・異物

問　空欄Ⅲ～Ⅵに入る語句として最も適当なものを、それぞれ選べ。思

ア　向学心
イ　自尊心
ウ　羞恥心
エ　敵愾心（てきがいしん）
オ　己の珠なるべきを半ば信ずる
カ　己の珠にあらざることを惧れる

キ　己の珠とならんことを切に願う

答　Ⅲ　ウ　Ⅳ　イ　Ⅴ　カ　Ⅵ　オ

問　傍線部6とあるが、この箇所の解釈として適当でないものを、次から選べ。思

ア　人間は誰でも、虚栄心や利己心という猛獣を持っていて、これをよく制御している。
イ　人間は誰でも、猛獣のような荒々しい気質を有しており、これを人間的な理性によって制御している。
ウ　人間は誰でも、「狂疾」の原因、「猛獣」を有しており、それとうまくつき合って生きている。
エ　人間は誰でも、激烈な社会変動という猛獣のもと、価値観の変化にともなう新たな道徳規範を模索している。
オ　人間は誰でも、欲望という内的自然を持つため、これを社会規範などに基づき抑制している。

答　エ

問　傍線部7についての説明として適当なものを、次から二つ選べ。思

ア　自分の今の苦境の中で、虎になったという現実を受け入れざるを得ない李徴の悲劇を印象づけている。
イ　自身の悲劇に向かい合うことができず、それに目を背けて日々を明るく生きようとする李徴の姿を表している。
ウ　詩人として名を成そうとしたがその夢を果たせなかった李徴の心が、「山の頂」で「空谷」に向かって吼える姿に示されている。
エ　獣たちや樹々に自分の苦しみを分かってほしいと思う一方で、その気弱さを見抜かれることを恐れる心が表現されている。
オ　百獣の王たる自分の力を誇示しようとして吼える姿に、動物たちに自分への畏怖の念を抱かせたいという思いが表れている。

答　ア・ウ

問　傍線部8とあるが、どういうことを言った表現か。説明せよ。思

答　自分は悲しみの涙を流しているのだということ。

問　傍線部9が象徴するものについての説明として最も適当なものを、次から選べ。思

ア　朝の訪れを告げるその月の色は、親友袁傪と二度と会うことができないと知った李徴の後悔を表している。
イ　光を失った月のように、まもなく人の心を失って虎になりきることになる李徴には、もう詩人としての希望が残されていないことを表している。
ウ　朝日に象徴される袁傪とは違い、白い月のように存在感のない世界で生きる李徴がいだくかすかな希望を表している。
エ　孤高を象徴する断崖の虎ではなく、道の上で咆える虎の姿に月を重ねて、まもなく命を失うことになる李徴を表している。
オ　李徴と袁傪の心をつないできた月が色あせたと示すことで二人の衝突を表し、決してわかり合えない二人を象徴している。

答　イ

問　『山月記』の構成上の特徴の説明として最も適当なものを、次から選べ。思

ア　前半を漢文体、後半を会話体にすることで、全体的に格調高い作品に仕上げている。

イ　主人公と対照的な袁傪が登場することで、虚構性の強い内容ではあるが読者に受け入れられやすくなっている。

ウ　袁傪一行の旅先での経験という形式にして、非日常的な世界の出来事であることを強調している。

エ　虎になった理由を繰り返し説明することで、超自然の怪異という物語の主題がよりわかりやすいものとなっている。

オ　作品の大部分が李徴の告白で占められているため、物語が真実味のある作品に仕上がっている。

答

イ

■山月記　中島敦　発展問題（比べ読み）

次の文章は、中島敦が『山月記』執筆の際に素材とした中国の伝奇小説『人虎伝』である。これを読んで、後の問いに答えよ。なお、一部に中略がある。

1

隴西李徵皇族子家於虢略。徵少博学、善属文。弱冠従州府貢焉。時号名士。天宝十五載春、於尚書右丞楊元榜下登進士第。後数年、調補江南尉。徵性疎逸、恃才倨傲。不能屈跡卑僚。嘗鬱鬱不楽。毎同舎会既酣顧謂其群官曰、「生乃与君等為伍耶。」其僚友咸側目之。

2

及謝秩則退帰間適、不与人通者近歳余。後迫衣食乃東遊呉楚間、以干郡国長吏。楚人聞其声固久矣。及至皆開館以俟之。宴遊極歓将去、悉厚遺以実其嚢橐。徵在呉楚且歳余。所獲饐遺甚多。西帰虢略未至舎、於汝墳逆旅中忽被疾発狂、鞭捶僕者不勝其苦。於是旬余疾益甚。無何夜狂走莫知其適。

従者は李徵を探すが見つからず、李徵の持ち物を持って逃げてしまった。翌年、李徵の旧友袁傪が、天子の使者としての旅の途中、偶然李徵に出会う。だが、李徵は草むらから姿を現さない。李徵は、去年病気にかかり発狂して虎になった、と語る。そして袁傪に、〈妻子には今日のことは言わず、「李徵は死んだ」とだけ告げてほしい。また、妻子を経済的に助けてやってほしい〉と頼み、袁傪は快諾する。李徵は、続けて以下のように言う。

虎曰、「我有旧文数十篇。未行於代。雖有遺稿、当尽散落。君為我伝録。誠不能列文人之口閾、然亦貴伝於子孫也。」慘即呼僕命筆、随其口書。近二十章。文甚高、理甚遠。閲而歎者至於再三。虎曰、「此吾平生之業也。又安得寝而不伝歟。」既又曰、「吾欲為詩一篇。蓋欲表吾外雖異而中無所異。亦欲以道吾懐而攄吾憤也。」慘復命吏以筆授之。

李徴は『山月記』と同じ詩「偶因狂疾」～「但成嘷」を詠む。

慘覧之驚曰、「君之才行、我知之矣。而君至於此者、君平生得時、所遭之数、吾又不知也。噫、顔子之不幸、冉有斯疾、尼父常深歎之矣。若反求其所自恨、則吾亦有之矣。不知、定因此乎。吾遇故人、則無所自匿也。吾常記之。於南陽郊外嘗私一孀婦。其家窃知之、常有害我心。孀婦由是不得再合。吾因乗風縦火、一家数人、尽焚殺之而去。此為恨爾。」

李徴は袁傪に、〈自分が虎の心に支配されて襲いかからないよう、帰り道は違う道を通ってほしい〉〈しばらく進んだら振り返って自分の姿を見てほしい〉と頼む。二人は深い悲しみをいだきながら、丁寧な挨拶を交わして別れた。

傪亦大慟。行数里、登レ嶺、看レ之、則虎自二林中一躍出咆哮、巖谷皆震。

4

後回レ自二南中一。乃取二他道一、不二復由レ此。遣レ使持二書及賻贈之礼一、訃二於徴子一。月余徴子自二號略一入レ京、詣レ傪求二先人之柩一。傪不レ得レ已具疏二其伝一。遂以二己俸一均二給徴妻子一、免二飢凍一焉。傪後官至二兵部侍郎一。

問　傍線部1とあるが、『山月記』では李徴が「皇族」の子孫だったという記述は出てこない。この改変により、『山月記』にどのような効果がもたらされていると考えられるか。最も適当なものを、次から選べ。思

ア　李徴を特別な出自ではない人物に設定することで、李徴が抱えた苦悩を一般の読者にも共有しやすいものにする効果。
イ　李徴を特別な出自ではない人物に設定することで、高い地位に登りつめた袁傪との境遇の違いを曖昧にする効果。
ウ　李徴を特別な出自ではない人物に設定することで、李徴が高貴な家柄に憧れる人物であることを暗示する効果。
エ　李徴を特別な出自ではない人物に設定することで、李徴の性情が低俗なものであることを読者に印象づける効果。
オ　李徴を特別な出自ではない人物に設定することで、李徴を作者自身の境遇に近づけて物語に現実味を持たせる効果。

答　ア

問　傍線部2とあるが、『山月記』では、李徴が役人を辞めた理由は何であったか。思

答　**プライドが高く低い官職に甘んじられず、詩人となって詩家としての名を死後百年に遺そうと考えたこと。**

問　傍線部3とあるが、『山月記』では、袁傪は感嘆しながらも「このままでは、第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないか」と感じていた。この改変により、『山月記』にどのような効果がもたらされていると考えられるか。適当でないものを、次から一つ選べ。思

ア　李徴の文学的な才能が不十分であったことがほのめかされ、李徴が文学者として名を成さなかったことに必然性が付与される。
イ　李徴には詩の豊かさを生む素地となる人間性が不足していたことが暗示され、李徴の変身の原因と文学者としての失敗の原因とが関連付けられる。
ウ　袁傪が李徴の詩を冷ややかな目で見ているという設定により、人間が虎になるという超自然の怪異に対して袁傪が疑念をいだきはじめたことが暗示される。
エ　『山月記』は、李徴が自分の才能を信じ切れなかったと設定しているが、袁傪からの否定的な評価が提示されることで、この李徴の自己評価の正しさが示される。
オ　「李徴は官僚として失敗した時点ですでに文学者としても一流になることは難しい」という、官僚が同時に文学者でもあった唐代における袁傪の価値観が示唆される。

答　ウ

問　傍線部4以降に袁傪の後日譚があるが、『山月記』ではこれは出てこない。この改変により、『山月記』にどのような効果がもたらされていると考えられるか。説明せよ。思

答　**具体的・現実的な話題ではなく、李徴の咆哮で作品が終わるようにすることで、李徴の精神的な煩悶に焦点を当て、超自然の出来事の余韻を残す効果。**

問　李徴が虎になった原因や、それを語る李徴の様子についての説明として、適当なものを、次から二つ選べ。思

ア　『人虎伝』では聞き手としての袁傪の存在を意識するあまり李徴は本心を語り尽くしていないが、『山月記』では心の内を隠さずにさらけ出している。

イ　『人虎伝』では李徴は、即席の詩を詠んだ後、袁傪にうながされて、虎になった原因を語り出すのに対し、『山月記』ではうながされずに自分から語っている。

ウ　『人虎伝』では殺人という具体的な行為が虎になった原因とされるのに対し、『山月記』では臆病な自尊心・尊大な羞恥心という抽象的な心が原因とされている。

エ　『人虎伝』も『山月記』も、李徴に危害を加えようとしたり嫉妬したりする悪意ある第三者が存在し、それにより李徴が陥れられて虎になるという点は共通している。

オ　『人虎伝』では罪を犯したため獣になるという因果応報的な設定がなされているが、『山月記』では文学を愛する努力家でありながら獣になるという不条理が描かれている。

答　イ・ウ

問　以下は『山月記』と『人虎伝』に関する教室での会話である。空欄Ⅰに入れるのに最も適当なものを、後から選べ。思

教師――『山月記』は中国の伝奇小説『人虎伝』を素材にして書かれています。しかし、細部を見ると、『山月記』と『人虎伝』とでは異なる箇所が多くあることに気づきます。『山月記』と『人虎伝』には、どのような違いがあるかを話し合ってみましょう。

生徒A―役人を辞めた李徴が、職を求めて楚呉に赴くという記載は、『山月記』には見られない『人虎伝』独自の展開だよね。

生徒B―そして、李徴は楚の国で歓待を受けている。「皆開館」とあるように、多くの人が彼を温かく迎え入れたようだ。『山月記』では、「人と交わりを絶って、ひたすら詩作にふけった」ともあるように、李徴はできるだけ人を遠ざけていたから、『人虎伝』における楚での李徴の様子は、『山月記』とは大きく違うように思うのだけれど、どうだろう？

生徒C―たしかに、そうだね。『人虎伝』では「僚友」「郡国長吏」「僕者」といった人たちも登場していて、『人虎伝』の李徴は人と交流することをそれほど避けてはいないようだね。

教師――よいところに気づきましたね。たしかに『人虎伝』では、李徴から「僚友」に言葉をかけたり、「僕者」を鞭打ったりと、李徴と関わる人物が登場することで、良くも悪くも他者との交流が確認できます。一方、『山月記』の冒頭では、李徴以外の人物は登場せず、李徴と周囲の断絶が強調され、李徴が自己分析で語った「世と離れ、人と遠ざか」ったということがここでも示されています。こうした改変には［Ⅰ］があるといえますね。

ア　李徴が虎になるという超自然の怪異を読者に受け入れやすくする効果

イ　胸中では人との交流を望んでいたという李徴の本心をほのめかす効果

ウ　李徴の心に育つ「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」に説得性を持たせる効果

エ　「最も親しい友」であったという袁傪との交友に疑念を生じさせる効果

オ　虎にさえならなければ李徴が詩家として名を遺す人物であったことを暗示する効果

答

ウ